

教育実践報告 体験を聴くことから

志 水 紀代子 (人間学部心理学科)

今年度新規事業として予算をつけていただいて、従来、個人のポケットマネーで授業の中で行なってきた外部講師を招いて行なう公開授業の規模を大きくし、今年度は、ゼミを除いて、担当しているすべての科目で(倫理学概論は、原則として通年で受講している学生が多いので合わせて1回だった)、外部から講師を招くことができ、受講生が大いに刺激を受けたことが、後の感想文やレポートを読むことでわかりました。いずれ小冊子にまとめてご報告する予定ですが、資料として、いくつかのレポートを添付します。

これまでも、実体験者の生の声を直接伝えるべく、授業で取り上げた本の著者などの講演案内などを学生にアナウンスして、そこに会いがあり、外の世界に触れるきっかけとなること、多様な生き方があることをメッセージとしては伝えてきたのですが、多くの受身の学生には、なかなか一歩が踏み出せないところがありました。大学の授業の一環として、講義時に会うことができかけとなり、その後大学の外に出て行く可能性も広がって、仲間を見つけ、一緒にボランティア活動をしていったり、他大学の大学院に挑戦していく学生が毎年少しでも増えてくるのが楽しみでしたが、今年はそのような機会が格段に広がりました。具体的に学生が将来に描く夢について、適切なアドバイスも直に得られて、このような橋渡しをすることも、大学教師の重要な役割であることを実感しました。

以下はその報告です。

1. 山田悦子氏(甲山事件冤罪被害者)「松下竜一追悼『記憶の闇 検証甲山事件』のこと」

「女性学A」2004年6月28日実施

ノンフィクション作家でミニコミ誌「草の根通信」の発行や、環境破壊の問題に対して、病弱な体をおして座り込みをするなど、発言し、行動する作家であった松下竜一さんが2003年6月17日に67歳で逝去されました。松下さんは、甲山事件でまだ一審の判決も出ていない段階で、山田悦子さんに会い、「どのような判決になろうと私は彼女の側に立つ」と、甲山事件を題材にした『記憶の闇』を上梓されました。山田さん、松下さんの、命がけで権力に立ち向かう真摯な出会いの中で生まれたこの作品を中心に、「甲山事件」を通して見えてくる人間模様をお話いただきました。

2. 辻光文・須重子夫妻（阿武山教護院元教官）「児童支援施設教員24年について」

「倫理学概論2」2004年11月12日実施

佐世保の小学6年生の女儿による同級生殺害事件は、日本全国に大きな衝撃を与えましたが、その加害女儿が、児童自立支援施設に預けられるということが話題になり、児童自立支援施設が「教護院」と呼ばれていた時代、24年間にわたってその施設（当時 大阪市立阿武山教護院）で、親代わりになって、子どもたちに接してこられたお二人に来ていただき、体験を話していただきました。週刊誌『女性自身』の記者が、お二人の自費出版された半生の記録『いのちのかけら - 生きてるだけではいけませんか』を知って、取材され、それが記事になったのですが、施設を出て行った子どもたちのその後のことが、さらに具体的に語られ、学生たちにおおきな感銘を与えました。また学生一人一人に冊子がプレゼントされました。

学生のレポートを読んで、夫妻からそれに対するコメントも返され、そこに「一見無表情で、感動を表さない学生たちが、こんなに熱い思いで話を聴いて下さっていたとは！」と大きな感銘を受けたことが綴られていました。

3. 山田悦子氏（甲山事件冤罪被害者）「司法改革の問題点 司法取引について」

「女性学B」2004年12月20日実施

アメリカにおける司法取引の現状は、これまでも多くの冤罪事件を生み出しています。

社会的弱者を踏みつけにし、彼らをないがしろにするアメリカ司法界の問題について、BSドキュメンタリーの番組を題材に取り上げ、日本でも行なわれようとしている司法改革のなかにこの「司法取引」を取り入れようとする動きがあることに、果たして人権がきちんと守られるのか、実際に拘束された体験を持つ山田さんから話を聞きました。

私が講じる女性学では、フェミニズムとは「社会的弱者の視点から、現実の社会の象徴秩序を問い直す思想運動」だと学生に説明しているのですが、そうした観点からこの問題を一緒に考えました。いいレポートが返されています。